

## 「聖ブランダンの航海」写本Aに おける間接疑問文の用法

伊 藤 了 子

### は じ め に

現代フランス語では、間接疑問文の従節の事行はいかなる場合にも直説法で表される。また古くは古典ラテン語以前のプレ・クラシックと呼ばれるラテン語でも直説法がしばしば用いられたが、古典ラテン語ではこの場合ほぼ機械的に接続法が用いられた。しかし間接疑問節中の直説法は、たとえ純粹の古典主義作家たちが避けたとしても、話し言葉の中では生き続けていたと考えられる。2世紀以降の話し言葉では直説法を使っていたらしい。その頃の文学語には古典ラテン語の伝統が根強く残っていたとはいえ、直説法の頻度が徐々に増え、ほとんどの作家が直説法と接続法を並用していた。

Moignet<sup>(1)</sup>によると、古典ラテン語以前のラテン語における直説法の頻繁な使用は、一方では疑問節が並置であり、従属とは考えられていなかったためであると考えられるが、他方、接続法と直説法を半々に使用しているプラウトゥスにおけるように、二つの法の間に批判的圧力の有無の対立が見られる。古典ラテン語においては機械的に接続法が用いられるので、この対立の例はないが、接続法の一般化は「圧力」の結果であるという。その圧力とは、*«la non-vision de ce qui est visé dans ce dont on s'informe, la prise de conscience, non seulement de ce qui est ignoré, mais aussi l'impuissance du locuteur à savoir par lui-même.»*<sup>(2)</sup>つまり、知り得ない事柄だけでなく、話者が、自力で知り得ないと「意識」することを意味する。

では現代フランス語とラテン語の間に位置する、古フランス語ではどうなっているのだろう。古フランス語の間接疑問節には直説法と接続法の両方が見られる。Moignet は、他の場合同様、間接疑問文も *idée regardante* が非批判的な場合と批判的な場合に、さらに後者をラテン語の模倣の場合と「ためらい」の圧力が見られる場合に分けている。Moignet がラテン語の模倣と言うとき、いくつかの例は示しているが、そこに古典ラテン語と同じように「事柄に関する無知とその意識」という圧力が認められるか否かについては全く触れていない。単にラテン語がそうであるから文学的な、教養ある文章を書こうとして接続法が用いられたのか、そうではなく実際に現働化を遮る何らかの圧力が存在するのかを知るのは興味あることである。Moignet によると、ノルマンとアングロ・ノルマンのテキストにラテン語法が多い。われわれは「聖ブランダンの航海」写本A（アングロ・ノルマン）を取り上げ、写本E（大陸フランス語）と比較しながら、そこで間接疑問節がどのように扱われているかを検討したい。

間接疑問文を導く疑問詞は、Moignet に倣って、*si* とそれ以外のもののふたつに分けて考えたい。*si* には現働化の力があるからである。われわれのテキストには間接疑問文が31例、その中の3例が *si*、他の28例はそれ以外の疑問詞に導かれるものである。

## I. *si* に導かれる間接疑問節

われわれのテキストには *si* に導かれる間接疑問文は3例しかない。うち2例が直説法、1例が接続法を従えている。

- |                                            |                                                     |
|--------------------------------------------|-----------------------------------------------------|
| 1) Alez querre par cez mesters             | 料理場に探しに行きなさい                                        |
| Si rien i at dun est mesters. (285, 6)     | 必要な物が何かあるかどうか。                                      |
| 2) Ne sai s'aosat mais poi l'en dit. (414) | 彼があえてそうしたのか私は知らない<br>が彼はそれについてブランダンに少し<br>しか言わなかった。 |

*si* 自体に現働化の作用があるので、従節の *idée regardée* の中で問題視されるのが事行そのものであるとき、直接疑問文と同じく従属関係は非批判的であ

る。

ところが、次例の *crie* は接続法である。

3) *Ne sai si jo mercit crie.* (1246) 私は慈悲を求めるべきか否かわからない。

これはひとつにはこの従節に要求されている意味が、「私が慈悲を求めるかどうか」ではなく、「求めるべきかどうか」であり、義務の観念を含まなければならないからということが考えられる。つまり、3) は 1), 2) のように事行そのものを問う文ではないのである。さらに、文脈から別の批判的圧力も読み取れる。発話者ユダはイエスに慈悲を乞うべきか否かと問いながら、実はそれが無駄であることを知っているからである。*Ne puis ne n'os, quar tant forfis Que jugemenz de mei est pris.* (1247, 8) 「私にはできないし敢えてしない、なぜなら私はあれほどひどいことをしたので、私に対する審判はすでに下されたから。」このように2重の批判的圧力によって、*si* の現働化の力にもかかわらず、*crier* は潜在的次元にとどめられたと考えられる。

## II. *si* 以外の疑問詞に導かれる間接疑問節

*si* 以外の疑問節は全部で28例あって、そのうち8例が接続法、残りの20例は直説法を伴っている。主節の動詞は *dire*, *saveir*, *vetheir*, *querre*, *conoistre*, *mustrer*, *enseigner*, *demander* 等、様々である。これらの例を注意深く検討すると、疑問詞の用法がふたつあることに気づく。

I. *Del larcin cument il l'out Conuit...* (336) 「盗みについて、彼（修道士のひとり）がどのようにしてそれを手に入れたかを、ブランダンを知っていた。」この場合の疑問詞の使用は詳述を避けるための手段であって、関係代名詞節「彼がそれを手に入れた方法」と同じ価値で使われている。これは、先に具体的描写がなされているので繰り返しを避けるためであったり、あるいは単に詳述を避けるための手段のひとつにすぎず、したがってこの疑問詞は疑問の価値を含まない。こういう用法が上述の例を含め全部で10例ある (23, 196,

609, 715, 1496, 1593, 1631, 1773, 1824)。これらすべてにおいて直説法が用いられており、その理由としては、主節の *idée regardante* が認識や言表であり、しかも批判的圧力が全く加わっていないことが考えられる。

II. それに対し、疑問詞が疑問の価値を保つ、つまり発話の時点で発話者にとって疑問詞の表すものの答えがない、白紙状態であるものが18例存在する。これらが I. と対照的であるのは、主節に、意志、疑問、否定などの *idée regardante* が含まれる点にある。そうするとそれらの従節はすべて接続法かという、必ずしもそうではない。ここに問題がある。Moignet は接続法の例にのみ注目しそこから法則性を引き出そうとしたように思われるが、我々は直説法の例にも注目し、それぞれの用法の相違を次に検討したいと思う。

## II-1. 直説法は10例ある。

これらは、従節の位置によって、2つのグループに分類できる。

その1.

- |                                                 |                      |
|-------------------------------------------------|----------------------|
| 4) 'Seignurs, co que pensed avum                | 諸君、我々が考えたことが         |
| Cum el <i>est</i> gref nus nel savum.' (127, 8) | どれくらい困難であるかを我々は知らない。 |

ここでは従節が前置され、それを代名詞が受け直すという形なので、この従節は独立節と同じように扱われている、つまり事行そのものを問う文と同価であると考えられる。

その2.

- |                                                     |                  |
|-----------------------------------------------------|------------------|
| 5) Cum se nombrent li cumpaignun,                   | 彼らが仲間の数を数えると     |
| En lur cunte failent a l'un,                        | ひとり欠けている。        |
| E ne sevent qu' <i>est</i> <i>devenuz</i>           | 彼らには彼がどうなったのか    |
| Ne en quel leu <i>est</i> <i>detenuz</i> . (1493-6) | どこに拘留されたのかわからない。 |

上の例5)では、従節の事柄は話者にとっては過去の確定事行である。数を数えるとひとり足りない。その者に何かが起こったことは確かであるが、それは何か。また、彼がどこかに拘留されたことは事実であるが、それはどこなの

か。疑問の対象は事行ではなく、疑問詞の表すものだけである。

また、次のふたつの例においても同様である。

- |                                          |                      |
|------------------------------------------|----------------------|
| 6) Ainz quil murget voldreit vetheir     | 彼は死ぬ前に見たいと思った        |
| Quel sed li bon <i>devrunt</i> avoir,    | 善人がどのように住みかを与えられるはずか |
| Quel lu li mal avoir <i>devrunt</i> ,    | 悪人がどのような場所を与えられるはずか  |
| Quel merite il <i>recevrunt</i> . (61-4) | 彼らがどのような報酬を受けるのかを。   |
| 7) Enfern pried vetheir oveoc            | 彼は地獄も共に見せ給えと祈る       |
| E quels peines <i>avrunt</i> ileoc       | さらにどこでどのような罰を受けるのかを  |
| Icil felun... (65-7)                     | それらの裏切り者たちが。         |

従節は未来の事柄に関係しているが、話者であるブランダン、義人や悪人がそれぞれ死後の場所を与えられること(6)、神を裏切った者たちが来たるべきときにそこで罰を受けること(7)を既定事行として確信している。話者のこの認識を現実の時の流れに位置づける、つまり現働化することは、我々の物語の中で非常に重要な役割を果している。というのは、この、他界の現存の確信こそが物語の起点であるから。

さらに従節が現在の事柄でも同じことが言える。

- |                                      |                    |
|--------------------------------------|--------------------|
| 8) .....‘Or me di,                   | さあ言っておくれ           |
| Itel repos quant tu as ici,          | これが休息であるなら         |
| En quel endroit te <i>demenes</i>    | 責め苦と罰のためには         |
| En turmentes e es peines?’ (1317-20) | どのような場所におまえは住むのかを。 |

ブランダンがユダに命じているのであるが、この直前にユダが、今は日曜日の休息を与えられているときであり、平日は地獄で酷刑を受けていると詳述しているので、彼がある場所にとどまることは話者ブランダンには既定事実として認識されている。

その他の例に関しても同様である。

- 9) Brendan lur dist: ‘Freres, savez Pur quei pour *out avez*? (467-8)  
 ブランダンは彼らに言う。「兄弟たちよ、あなたがたは知っているか、なぜあなたがたが恐れたかを。」

- 10) 'Di mei, dolenz, Pur quei *suffres* icez turmenz?...' (1255, 6)  
 言っておくれ、悲しむ者よ、なぜおまえはこれらの罰を受けているのか。
- 11) 'E certainement me di qui *es*....' (1259)  
 そしてはっきり言っておくれ、おまえがだれなのかを。
- 12) Comandet lui qui lui diet Que li dras *deit* dum se liet (1441, 2)  
 ブランダンにユダに言えと命じる、彼（ユダ）を縛り付けている布は何に由来する  
 のかを。
- 13) E la pere u il se tint Demandet dunt e de qui *vint*. (1443, 4)  
 ブランダンに尋ねる、かれ（ユダ）が乗っている岩はどこから、誰によって来たの  
 かを。

以上、直説法10例のうち、4)は独立節的用法で、5)から13)では主節の *idée regardante* が意志であれ、否定あるいは疑問であれ、それらの影響は疑問詞にしか及んでいず、さらに話者は従節の事柄が既定事行であると認識していることが明らかになった。

## II-2. 接続法 8 例。

これら8例中7例(17を除く)は Moignet によって引用され、a) ラテン語法によって説明されるもの3例と、b) 主節が「*ne sai* 文」の4例とに分類されている。彼は、後者の「*ne sai* 文」もラテン語法で説明されるであろうがそれだけでは不十分で、なんらかの批判的圧力がわずかではあるが感じられるとしている。

しかし、a) に関してわれわれのテキストにおいては主節が同じ *idée regardante* であっても、従節の法は一定していない。つまり、自動的にラテン語法が採用されているわけではない。ラテン語法以外に説明はできないものだろうか。直説法の場合と違い、接続法の使用例になんらかの批判的圧力が加わっているのではないだろうか。直説法の例と比較しながらわれわれのテキストの3例を検討してみたい。

- |                                                                                       |                                     |
|---------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------|
| 11) 'E certainement me di qui <i>es</i> ....' (1259)                                  | そしておまえが誰なのかははっきり言<br>ておくれ。          |
| 14) 'Primes me di que tu <i>seies</i> ,<br>En cest liu que tu <i>deies</i> ' (515, 6) | まずおまえが何なのか言っておくれ、<br>この場所は何を意味するのか。 |

11), 14)においては、一見全く同じ条件なのに一方は直説法で他方は接続法が使用されている。これはどういうことなのか。これらの文の置かれている状況、文脈を見る必要がある。11) では人間の姿をしている男(ユダ)に対しブランダンが「誰なのか言え」と命じている。人間の名前が返ってくることが期待されている。彼が誰かであることは問を発している話者にとっては当たり前のことであるようだ。それに対し14) はブランダンが小鳥たちに対し何者であるかを問う文であるが、かれらが普通の小鳥でないことは、この世のものとは思えないその美しさからブランダンにとって明らかである。小鳥の姿をしているがただの小鳥ではなさそうだ。それではなにものなのか。ブランダンにはまったく予想ができない。結局「小鳥でない」というこの否定が大きな批判的圧力になっているのではないだろうか。次の例はどうか。

- |                                               |                        |
|-----------------------------------------------|------------------------|
| 15) Li abes prent a merveiller                | ブランダンは驚き               |
| E priet Deu sun conseller                     | 彼の助言者である神に祈る           |
| Que li mustret quel cose <i>seit</i> ,        | それが何であるのかを教えたまえ        |
| Si grant plentet des oiseus que <i>deit</i> , | これほど多数の小鳥は何を意味するの<br>か |
| Quel leu co <i>seit</i> u est venuz. (501-5)  | 彼が来たのはどのような場所なのかを。     |

v. 504 の *doit* は直説法であるが、主節から最も離れた v. 505 さえ接続法であるので、これは押韻のためであると考えられる。ただの小鳥ではなく、ただの鳥ではなさそうだ。では一体何か。

- |                                                |                          |
|------------------------------------------------|--------------------------|
| 16) Veient en mer une boche                    | 海に陸起が見える                 |
| Si cum co fust une roche;                      | まるで岩のような。                |
| E roche fut verablement,                       | それは実際岩であった               |
| Mais nel quient creablement.                   | しかし彼らは信じることができない。        |
| Dunc dist l'abes 'Ne demuruns!                 | そこでブランダンが言った「さあ急ご<br>う。」 |
| Sachum que <i>seit</i> , si i curum.' (1213-8) | それが何か知ろう、そこに急いで行こ<br>う。」 |

(写本 E. v. 1218は他の文: Vers ceste roche retornons)

岩に見えるがただの岩ではなさそうだ。では何なのか。

14), 15), 16) の 3 例ではいずれも、話者は目に見える現象を否定し、それ

以外の答えを期待している。しかしそれ以外の何かである確信はない。つまりそこには強い疑いの批判的圧力が存在すると同時に、話者（あるいは主節の主語）の認識は「完全な無知（白紙）」の状態にある。余談になるが、この小鳥たちは小鳥ではなく「墮天使」、この場所はただの島でなく「小鳥たちのパラダイス」、この岩はただの岩でなく「ユダをのせた岩」とであるという、話者が全く予想していなかった答えが与えられる。

次例は Moignet には引用されていない。また写本 E では直説法が用いられている。

- 17) Cume alouent, le abes ad quis                      歩きながらブランダンが尋ねた  
 Quels leus co seit u se sunt mis. (665, 6)    彼らが今いるのはどのような場所であるのかと。  
 (写本 E ind. est)

これはブランダンが訪問先の土地の修道士に話している場面だが、彼（話者）が目にしてしている事柄に関し彼自身に強い疑いを起こせざるような要因が、文脈の中になく。少なくとも、14), 15), 16) ほど顕著な要因がない。写本間の法の揺れはそのためであると考えられる。

以上、17) を除く上記 3 例においては単なるラテン語法ではなく、実際にかなり明確な批判的圧力が及んでいることが明らかになった。

次に b) *ne savoir* という認識の否定について。この *idée regardante* も本来疑問詞のみにかかり、*idée regardée* を潜在的次元にとどめる力は持たないはずである。そこで何らかの批判的圧力が加わっていると考え、Moignet はこの「*ne sai* 文」を単なる「無知（知らないこと）」ではなく、「ためらい」の批判的概念を含む表現とし、その概念を次の 3 つに分類している。① 取るべき決断を前にしての迷い（ためらい）、② 「未来に関して議論を打ち切る力のないこと」を表す（2 つの動詞の主語が同一でない）。③ 「現在に関して問題の答えを見つけられないこと」を表す。

われわれのテキストで上の ① に相当すると考えられるのは次の 1 例のみである。

- 18) Quer ne sevent quel part aler,                      というのは彼らにはどちらに行くべきか



(写本 E: Car ne seivent quel part aler  
Ne lor droit cors bien asener  
Quel part bouter ne quel part tendre  
Ne u il *doivent* lur cors prendre)

Moignet が言っているように取るべき決断を前にしての迷いを表すので, *idée regardée* は現働化の必要はないといえる。しかし *devoir* に関しては, 直説法現在 3 人称複数形は接続法と同形であるので, この *deient* が直説法か 接続法かは語形から判断することはできない。同じ *ne sevent* に支配されていても v. 234 では *devrunt* 直説法未来形になっている。写本 E ではこの箇所は *doivent* であり, やはり *deient* と同様, 直説法か 接続法かの決め手はない。Moignet は多分接続法であろうと述べている。しかしここでは *devoir* は法の助動詞として使われており, 動詞の接続法と同じ価値(「義務」)を持つと考えると直説法の可能性もある。

⑥ に相当する例はわれわれのテキストにはない。

© には, Moignet がわれわれのテキストから次の3例を引用している。

19) 'Quel nature nus ne savum                      どのような性質のものか我々は知らない  
*Aient li duit que truvet avum.*' (649, 50) 我々が見つけたこの小川が。

ある島に上陸した修道士たちは死ぬほど喉が渇いている。彼らは急ぎその水を飲もうとするが、ブランダンは上のように言って禁じる。すると Les diz l'abes cil les *crement* (651)「彼らはブランダンの言葉を恐れ」焼けるような渇きを耐える。全く得体が知れぬ水というニュアンスが伝えられていると考えられる。当然話者は事柄に関する「完全な無知」を認識しているであろう。

20) Nuls d'els ne set en feid veire Quel il <i>seit</i> faiz de materie, (1673, 4)	彼らの中には誰ひとりとして全くいない それがどんな材料でできているのかを知 っている者は。
---------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------

(写本 E : Nuls d'els ne sot con fais il ere

Dont il soit fais de quel matere)

これは海にそびえる巨大な透明の柱で、雲までとどく。船ごと入ることができ、中には祭壇がある。一旦中に入ったブランダンは「神の神秘を探ってはいけない」と言い、一行と共にそこを去る。ここでは *en feid veire* (= *vraiment*) という副詞句が、事柄に関する主体の「完全な無知」を強調している。これは人間の小ささと、神の偉大さを強調するのに役立っている。写本Eに関しては *fais il ere* と次行の *il soit fait* は意味が重複した無器用な文で、直説法半過去 *ere* は押韻のためであると考えられるので、考慮の対象から除く。

問題は、写本Aが接続法でEが直説法の21)にある。

- 21) 'Fors mei ne set uns suls de nus                      私以外には我々の中で誰一人知らない  
 Quels des dous *seit* plus penus.' (1335, 6)            2つの地獄のうちどちらの方が厳しいかを。

(写本 E ind. *est*)

2つの写本における法の違いは、*fors moi* 「私以外」という言葉があるので、視点が話者の「私」にあるか、主節の主語「彼らの中の誰も」にあるかによると考えられる。視点が私にあるばあい、「私は知っている」からその内容を表す従節は事実として現働化され得る。それに対し、他の者たちはひとつの地獄しか知らないから、比較のしようがない。つまりどちらの方が苦しいかという問題に関しては「完全な無知」の状態にあり、したがって現働化に及ばず接続法が用いられている。

以上、接続法8例中、「*ne sai* 文」に限らず、6例が、「完全な無知」を話者や主節の主語が「認識」した場合に接続法が用いられることを示している。残り2例の中、1例は完全な無知の「認識」が文脈に読み取れない場合で、写本によって法が異なっている。既知事行であることの認識も明確でないし、完全な無知の認識も明確でない例である。あとの1例は「べき」という義務の意味で使われている助動詞 *deient* (*deivent*) が接続法であるか直説法であるか、語形からは判断できないケースであった。また、写本Aは8例すべてが接続法を従えているのに対し、写本Eはうち4例が直説法であった。これら4例の中、

1 例だけが説明がつきにくいものであったが、この1 例だけでアングロ・ノルマンは好んで接続法を用い、大陸フランス語は直説法を好むとは言えない。

### さ い ご に

以上、我々のテキストの間接疑問文を I. si に導かれるものと、II. それ以外の疑問詞に導かれるものに分けて検討した。I. においては現働化の力を備える si をもってしても、強い否定や義務の批判的圧力が加わる場合には *idée regardée* は現働化されず、潜在的次元にとどまること、さらにIIは1) 疑問詞が疑問の価値を持たない例はすべて直説法、2) 疑問詞が疑問の価値を持つ場合は、話者が従節の事柄を確定事行と認識すれば直説法、事柄に関する自身の完全な無知を意識すれば接続法が用いられる傾向があることを明らかになった。以上のことから、われわれのアングロ・ノルマン語テキストの間接疑問文における接続法の使用は単なるラテン語の模倣ではなく、実質的にかなり明確な批判的圧力が加わった結果であるといえる。このことが他のアングロ・ノルマン語のテキストにもあてはまるかどうかは今後検討していきたい。

### 注

- (1) *Essais sur le mode subjonctif en latin postclassique et en ancien français*, Paris-Alger, 1959.
- (2) 同上 p. 173

### テ ク ス ト

写本A—ロンドン大英図書館。Cotton Vespasian B. X (I), ff. 1-11.

写本E—パリ、アルスナル図書館, 3516, ff. 96-100v.

### 参 考 文 献

- WATERS (E. G. D.)—*The anglo-norman Voyage of Saint Brendan by Benedeit*. Oxford, 1928.
- SHORT (Ian) and MERRILEES (Brian)—*The anglo-norman voyage of St. Brendan*, Manchester 1979.

BREKKE (K.)—Etude sur la Flexion dans le voyage de S. Brandan, poème anglo-norman du XII siècle, Paris, 1884.

MOIGNET (Gérard)—Grammaire de l'ancien français, Paris 1973.

MOIGNET (Gérard)—Essais sur le mode subjonctif en latin postclassique et en ancien français, Paris-Alger, 1959.

——文学部専任講師——